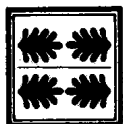


時の葦舟

荒卷義雄





講談社文庫

時の葦舟

荒巻義雄

昭和54年2月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国オフセット株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Yoshio Aramaki 1979

Printed in Japan

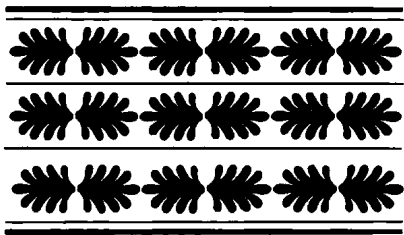
0193-361211-2253(0) 280円

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

講談社文庫

時の葦舟

荒巻義雄



講談社

目次

白い環

七

性炎樹の花咲くとき

五九

石機械

二九

時の葦舟

一七七

夢の構図——あとがきに代えて——

三三四

解説

山野浩一

三三八

時の葦舟

白 い 環

I

むろん幾度かの大変動におそわれたとはいえ、大陸は、全体として平静を保っていた。それは巨大な陸のつらなりであり、たんたんとして、乾ききった台地の世界をくりひろげていた。

そのほば中央のあたり、もし天空より飛び来たる者のあるとすれば、あたかも人為の航空標識とみまごうごとくに、「白い環^{かん}」はあるのだった。塩の結晶をきらめかせている大塩海。この巨大な内海は、大陸の四方より流れ入る河をあつめている。が、いま幾万年の乾期のきわまりにむかいつつある大陸にあつては、海はそのなぎさはるかに後退させていたのである。

いふなれば、「白い環」とはそのなぎさの跡だ。慢性的な乾期の太陽が、流れ入る河よりも多くの水を奪いさり、そこに白く輝く塩の環をつくっているのだ。と申しても、この中央海はなお広がった。ときには吹きわたる風によつて、青緑色の水面^{みづうみ}をさわがせることもあった。

ゴルドハの故郷は、この巨大内海の畔よりやや離れたところ、そこへ流れこむ河のひとつが、長い年月のうちに大陸の台地を深くえぐりつつた谷間の中にあつた。そこにひとつの「街」がある。不思議な街だ。

住民たちがソルティと呼び慣わしているこの街は、その谷間の切り立ったような白い崖の片側を利用してうがたれているのだった。それは、まるで地の中にひそみいるように存在していて、

外よりみられても気づかれない。だがひとたび、谷間の中に入りさえすれば、そのなめらかな崖の面に、沢山の明り取りの窓や煙だしや回廊風の通路などの影が、くっきりと浮かびあがっているのがみえるのであった。

いわば「面的な街……」。ソルティはそんな集落だった。この街が、なぜこんな風に造られているのか、住民たちは気づきもしない。いや、不思議にさえも思わない。そして、さらに面白いことには、その向かい側にあるこちら側と同じような対岸の崖が、なぜか街の建設のために利用されていなかったのであった。

これには、理由があつた。この谷間の底を流れる川の向こう側へは、ソルティの者たちはいつたことがないのだ。いこうともしなかったし、誰も試みた者はいなかった。いきたくてもいけない、ということを知っていたのだ。つい間近にありながら、声をかければときそうなの崖。が、この対岸の崖へむかつて声をかけても、こだまは返ってこない。この無響の崖は、こちら側の姿をありのまま反映させておりながら、音だけを反響させないのである。

それは鏡のような崖。というよりは、鏡そのものに他ならぬのだろうか。この「鏡」は、ソルティの街の全体を、そっくり映しだしているのだった。そこに住む住民たちの姿も含め、何から何まで。いや、鏡面の映像以上の実在と申してよいほど、いつも、もうひとつのソルティがそこに在るのであった。

虚像のソルティ……。そのソルティへむきあつて、ゴールドハは子供のころ、よく「鏡の遊び」をやった。対岸にいるもうひとりの自分に話しかけるのである。声は吸いこまれていき返事はないが、あかんべえをすればむこうもあかんべえをし、なぐりつけるまねをすれば、むこうもそう

するのである。

それが、自分の影であるのか、もっと別なものなのか、彼にはわからなかった。ともあれ、ゴールドハはこの街のすべての住民たちと同様に、対岸の鏡によって何もかも映しだされながら成人してきたのだった。

その日の午後、ゴールドハは、懸崖の一番高いところにある彼のすみかへの昇り路を、ゆつくりした足取りで、水をかつぎあげていた。水汲みの仕事は、ゴールドハのこの街での職業だったのである。

河にちかい下層の場所では、特殊なつるべや吸い上げ装置を使って、河の水をとりいれる方法もとられていたが、そうした装置の恩恵にあずかれるのは、街の富裕の者のみに限られていた。街の大部分の者たちは、自分で水を運びあげるか、ゴールドハたち水汲みを職業とする者から買わねばならない。むろん、この仕事は体力のいる、しかもつらく単調な仕事で、誰にもできるという職業ではなかった。

「水はいらんかね」

と呼びながら、ゴールドハは日に幾度も、つづらおりにつづく斜路や階段を、往き来する。いかに運びあげられる水の量はわずかで、たいした収入にもならなかった。

「水はいらんかね」

昇り路は、上の方へいくにつれてだんだん狭くなり、やっと人が一人だけ通れるくらいになるが、ところどころに身をかわす場所があって、上からきた者がそこで登ってくる者を待つことになっている。街の住民たちは、ほとんど顔みしりだから、こんな場合、互いに挨拶をかわす。挨拶

撈ただけではなく、長いこと立ちどまって、天候のことなどからはじまって色々な噂話にふけることも多かった。

「ああ、ちようどよかったよ。一杯、おくれな」

一段下の回廊のところに住んでいるおばさんに声をかけられ、ゴルドハは、台地とかげの皮でつくった背囊せふさくのわきから引き出してある管の栓をぬいた。澄んだ水が、皮のカップの中に用心深くそがれた。八分目ぐらいになると、ゴルドハは器用にその管の口を指先でおして、また栓をする。

おばさんはカップを受けとって、うまそうに最後の一滴までのみ干して、「ありがとうよ」といって銭を渡した。この女は、亭主の仕留めた砂とかげを一匹せおっていて、肉商人のところへ売りにいくところだった。

とかげは上の台地にいる。ふだんみかけるやつは、これほど大きくはない。種類もちがっていた。

「どこで獲ったのさ。立派な獲物だな」

と、ゴルドハは尋ねた。

「よくはわからないが、台地の奥の方だよ。とかげ取りのあまりいかないうちの岩山の裏側で獲れたそうだ」

と、おばさんはいって、亭主を自慢した。

「うちのやつは、日頃は能なしたが、たまにはいいところをみせるのさ」

「ああ、そうだと」ゴルドハはうなずいた。「とかげ取りとしちゃあ、いい腕だって皆がいっ

てるよ」

おばさんは、ちょっと相好をくずしかけたが、おだてられて足の一本もせびられては損するとも考えたのか、「じゃあ」といってそそくさと、その場から去っていった。

「水はいらんかね」

また水売りの呼び声をかけながら、ゴルドハは坂道を登っていった。途中で一息いれる場所は、自分できめていた。そこは崖の八分目あたりのところで、見晴がよく、対岸の大鏡面が、一望にみわたせるのであった。見慣れた眺めとはいえ、ゴルドハには秘かな愉しみがある。そこから直接には頭上や足元になった街の全景はみえないが、大鏡面の中にはソルティの隅々までがつしだされていた。

鏡面の中を、さっきのおばさんが、もうかなり下の方の路をくだっていく。その辺の富裕者の階層では、回廊や入口や窓のひとつひとつに、複雑な模様などが彫りこまれていて、規模も大きい。道も手引車が往来できるくらい広く、様々な物を売る店などもあり、いわばこの垂直の面的な崖の街の繁華街になっていた。

ゴルドハは、路端に腰をおろして、ここからこうやって、物を買ひ求めたり、立ち話をして、往き来している住民たちの姿をみるのが好きだった。注意さえすれば、誰が何を買ったとか、誰その家へいったとか、誰と話をしていたとか、街中のことは何でもわかってしまう……。このゴルドハも、街の住民たちと同様、なかなかの物知りで、こまごましたことまでよく知っていた。

むろん知識というほどの内容ではない。噂話の種でしかなかった。ときには、嫉妬や羨望のい

りまじったかげ口の種ともなる。人々は、こうした話題を口にしながら、日頃のうき晴しを無意識のうちにやっているのである。

まして、これという娯楽のないこのソルティの街では、この鏡壁を利用した盗み視が、その代りをはたしていた。ただし、この街では、お互いがお互いを視ると同時に、また視られているのだから、至極、公平といえた。でも、やはりよい多くの注視を浴びる者もいる。その人物は、何らかの理由で知名人ということなのだから、これはこれで仕方がない。いま、ゴールドハが、熱っぽい視線を、河上の方へ移していつてとどめた、白い家の主も、そういう意味でこの鏡面あそびのスター的存在だった。

ゴールドハは、ちよつとがっかりする。白いカーテンが、昨日同様かかっている、その家の女性の姿がみえなかったからである。ゴールドハは、それでも辛抱よく待っていた。ひよつとして、風が溪谷をふき抜けてきて、カーテンをそよがせてくれるかもしれない、と思ったからだ。気のながい話だが、この時がゆるやかに流れている太古の街では、別におかしくはない。ゴールドハ以外にも、いま彼と同じく、あこがれの人気スターのお出ましを、じつと待っている若者たちが、何人も何人もいるはずだった。

彼女は、ソルティの青年たちに、とりわけ人気があったのである。年齢は決して若くはないが、清楚な美貌の持主である。よく窓際のところに坐って、鏡崖とむきあって髪をすいている。高貴な女性であることは、住んでいる階層の位置でわかったが、実際どんな身分なのかは、謎に包まれていた。

それだけに、気品のある顔立ちや優美な姿態が、いっそう神秘的な雰囲気にとりかこまれてみ

え、若者たちはますますあれこれと詮索するのだった。

長い時間待っていたが、ゴルドハはついにあきらめた。カーテンはびくりとも動かなかった。夜になれば機会があるのだから、とゴルドハは思いなおしたのであった。内部のあかりがともされると、いやおうなしにその女性の影が映しだされるのだ。

ゴルドハは、また坂道を登りはじめる。

「水はいらんかね」

「水はいらんかね」

足元を一步一步と踏みしめるように登っていくこの水汲人足の四肢は、その都度、筋肉を躍動させていた。

2

この、古き古き大陸は、ソルティの街に住む住民たちによって、何と呼ばれていたかは不明である。名前などつけられていなかったのかもしれない。この者たちにとって、この大いなる陸の世界は、それ自体、ひとつの世界であつたからだ。よもや荒涼たる大地のつづくその果に、この陸塊をとりかこむ青い海原があるなどとは、想像だにしなかったにちがいない。この者たちは、自然というものが神と名づけられる存在を超えて古くあるように古く、その古き悠久の時間の中で全き自然と合体しつつ生きていたと思われる。

はや、種族それ自体の記憶さえも、乾ききつた大地の長大な歴史と共に忘れさられていた。あたかも、彼らの存在そのものは自然物と見分け難き逼塞ぶりであり、幾万年、幾十万年、否

ひよっとすると幾百万年かもしれないのだ。

その長くゆるやかにつづく時間の経過のうちに、大自然とこの種族との融和がおこなわれたのであろうか。それゆえにか、いまは、彼らはこの大いなる大地より、諸々の地上の生き物共が、そこより生まれきたったように、産まれたのだ、と信じきっていた。

たとえば、砂とかげが、赤ちやけた台地の砂漠の中の卵から生まれてくると同じだった。そのように、自分たちの祖先もまた、土の中より這いだしてきたのだ、と思ひこんでいた。そして、死ねばふたたび、大地へと還っていく。生まれた場所へもどりゆくのだ……。

この一種の循環の観念は、大地の上で生きるものはすべてそうだが、天然自然の諸現象にもあてはまったのである。

雨……。大地より陽炎となって昇っていた水が、ふたたび地上へもどってくる。帰郷するのである。太陽もそうだった。大地のはるか東より昇って、大地の果に帰るのである。

このように、彼らの経験するすべての現象で、この循環の観念で説明できないものはなかった。

ただあらゆる生成の母体であり、かつ生成されたものが立ちもどっていく場所である、大地のみは別格だった。大地は、永遠にありつづけるものであり、すべての現象の原因となる普遍的な存在だった。そして、彼らの思想によれば、この大地は、あるとき、天と地の混沌とした状態より分離したのだ。それゆえ、天と地は、なお無限の大地の彼方、地平線上においてつながっているのである。

また、それがなぜ分離したかといえ、天は軽く、地は重かったからである。したがって、重